

ダイバーシティリレーエッセイ～様々なひとの多様な視点～

料理で見つけた“家族との新しいつながり”
Strengthening family bonds through cooking

木村 知史

昨年4月から初めて単身赴任生活を始めました。勤務地は東京、家族は兵庫。毎週末、新幹線で家に帰る生活を続けています。家族は妻、小学6年の長女、小学3年の長男、そして4歳の次女。離れて暮らすことで、家族との時間の大切さを改めて感じるようになりました。

単身赴任に加えて、長女が思春期に入り、以前より会話が減り、妻を介して話すことが多くなっていました。距離を感じることもあり、「どうやって会話しようか」と考えていたころ、あるきっかけが訪れました。それが“料理”です。

これまで料理は、妻が急病のときや出産のときなど、特別な事情があるときにしかしていませんでした。しかし、家族の東京旅行資金を作るために外食を減らそうと考え、週末に帰るたびに朝・昼・晩の食事を作るようになったのです。最初は節約のためでしたが、次第に料理そのものが楽しみになり、子どもたちの笑顔が何よりのモチベーションになりました。

テレビで見たレシピをスマホで撮影し、「これなら子どもたちが喜びそうだ」と思えば、週末に試してみる。そんな小さな挑戦が、家族との会話を増やしました。食卓で「これ、うまっ!」という声が上がると、それをきっかけにたわいもない話が始まります。「次は何食べたい?」「あとどれだけ食べられる?」そんなやり取りが、単身赴任生活で感じていた家族との距離を少しずつ縮めてくれました。特に長女との会話が自然に増えたことは、私にとって大きな変化です。

料理を続けるなかで、改めて気づいたことがあります。それは“料理は想像以上に大変だ”ということです。献立を考え、買い物をして、時間を逆算しながら段取りを組む。簡単そうに見える一品でも、手間と工夫が詰まっています。これまで妻に任せきりだった料理の大変さを、身をもって実感しました。だからこそ、家族の「おいしい」という一言が、何よりのご褒美になります。

多様性という言葉は、国籍や性別、肩書きなど目に見える違いを指すことが多いですが、実際にはそれだけではありません。人生のなかで役割が変わることや、新しいことに挑戦する過程にも、多様性は存在します。私自身、単身赴任をきっかけに料理という新しい役割を担うようになり、家族との関係や自分の視野が広がりました。こうした変化もまた、多様性の一つだと強く感じています。

単身赴任という環境の変化は思いがけないものでしたが、そのなかで家族との絆を強める新しい方法を見つけることができました。これからも、身近なところにある“多様性”を楽しみながら、自分らしい挑戦を続けていきたいと思っています。

多様な研究分野での経験を活かして
Building on my diverse research experiences

徳永 透子

私は北海道大学 大学院工学院 材料科学専攻で松浦 清隆 教授と大野 宗一 准教授（現 同大学教授）にご指導いただき2015年6月に学位を取得しました。その後、同じ研究室で助教として勤め、2019年10月からは株式会社青森原燃テクノロジーセンター（青森県量子科学センター（QSC）駐在）、2021年4月からは名古屋工業大学 物理工学科の材料組織・塑性制御工学研究室にて勤務しています。早いもので名古屋での生活も丸5年になります。

北海道大学では、塑性加工プロセスを用いた金属基複合材料の開発、組織制御に関する研究を行っていました。また、博士後期課程在籍時はダブルディグリー制度を利用して、ポーランドのAGH科学技術大学（現クラクフAGH大学）のMaciej PIETRZYK（マチェイ ピエトシク）先生のもとで塑性加工プロセスの有限要素解析や感度解析を用いた統計的な解析に触れてきました。

その後、縁あってQSCという青森県のサイクロトロン施設で勤務することとなりました。QSCでは中性子線と陽子線を利用することができ、中性子イメージングやBNCT（ホウ素中性子補足療法）、薬剤合成など、北海道大学に在籍した際にはまったくかかわることのなかった分野を、少しずつですが多く学ぶことができました。中性子とのかかわりも、マウスに触れたのも初めてで、非常に貴重な経験となりました。

その後は名古屋工業大学で再び大学教員として勤務することとなりました。名古屋工業大学では、萩原 幸司 教授のもとで、種々の金属基構造材料（Fe, Al, Mg, Tiなど）の新規開発、マルチスケールな組織制御による力学特性の向上、特性制御、そしてそのメカニズム解明を目指した研究を行っています。

以上のように、これまでの所属やテーマもさまざまではありますが、さまざまな場所でさまざまな文化に触れて活動してきました。国籍や性別という観点でのダイバーシティについては特に障害を感じることなくこれまで歩んできました



大学内には一本松古墳という古墳があります。紅葉の時期はとともきれいです。

が、研究分野という意味では自身のダイバーシティ感を育てるうえで刺激的な人生なのではないかなと感じています。この経験を活かし、これからもさらに（少しずつ）刺激を入れて、研究を発展させていきたいと思っています。